



随

想

シヨート・シヨート

平山 玄

電気関係にシヨートという現象がある。AからBを通してCへ行くべき電気が、BをすっぱかしてAから直接にCに通じるとスパークして事故を起こす。電気がAからBを通してCへ行くように設計してあるのに、それを無視するからである。

シヨートは電気についての現象であるが、われわれの物の考えかたや行動にも、これに似た現象がある。吉田元首相は「く

せ」のある人で、いろんな意味で新聞種になった。そのころの演説会では、悪いのは政治であり吉田が悪いからである、吉田内閣を倒せというような演説をぶつたものである。当時の食料難やインフレは、吉田内閣の施政とならぬかの関係はあろう。しかし食料難やインフレを吉田内閣と直接に結びつけるのはシヨート現象である。

良識の府である大学のなかにもシヨート現象が見られる。民主主義は政治上の主義である。ところが教育の民主化とか大学の民主化と称して、大学に関係のある人や団体が学問研究や教育そのものに干渉する場面が見られる。人びとの集まりは、つねに政治の側面をもっている。この側面を民主化するというのであれば問題はない。しかし学者でも教育者でもない人びとが、学問研究や教育そのものに干渉してもよいというのはシヨート現象である。無縁ではないといっても、どういふふうに関係しているかのルートを無視するところにシヨートが起こるのである。

社会現象にシヨートの現象が起こるのは、もともと社会現象は人間の創造する現

象であって、自然のようにあらかじめ与えられているものではないからである。人間が過去の遺産に新しいものを創造して積み重ねたものが社会である。その意味で社会現象は歴史である。歴史はくり返えずという言葉があるが、それは酸素と水素が化合すれば水になるというような、くり返えしではない。同じ失敗をなん回もくり返えすのは、人間の世界では智慧のないこととされる。社会現象は、人間が智慧をはたらかせて作り上げる現象であるから、つねに進歩し発展する。そこでは単純なくり返えしは無意味である。そこで、社会現象の関連がきわめて複雑となる。単純な理くつでは割り切れないことになる。ある哲学者の表現を借りるならば、見通しがたき多様性をもつことになる。そこにシヨート現象の起こる危険が生じることになる。

筆者の長い教員生活で感じることは、学校の優等生がかならずしも社会の優等生ではないということである。学校と社会は別なものだ、といってしまえばそれまでであるが、学校はやはり社会のなかのものであり、卒業生は社会において活躍しなければ

ならない。学校と社会をショートさせることは危険であるが、両者の関連を明らかにすることは、ショートの危険を防止すると同時に、両者を生かす道である。学園を治外法権地帯のように考えるのはばかげたことであるが、学園に妙な期待をかけるのもおろかなことである。(商学部教授・景気論)

## 見はてぬ夢

片山 春一

終戦後はじめて現われた旧友を、新春の年頭に、案内して学園の隅々まで見せ、御所をぬけて街を歩き、京都ホテルで夕食しながら夜のふけるまで漫談に過ぎた。末の息子を母校の大学に入れたい話もきかされた。久しぶりに見る同志社の感想でも出るのを私は心まちにしていた。併し、彼の口から漏れたのは「いつ来ても御所はいいね」であった。元来が無口な皮肉屋の彼であり、旧友といっても私のように同志社に根を下ろした者に向っては、うかつなことはいえない遠慮もあったのだろうか。別れ

の握手しながら、ほろ酔いの老眼で私を見つめて「息子はこのびのびした若者になってほしい。同志社は息苦しくなったね。」

彼の残した言葉は私の胸から容易に消えそうもない。学生のいない冬休みの閑散なキャンパスを消遥しながら彼の感じとった息苦しさはどこからくるのか。近代ビルのせめぎあう大学工場街の裏道にも似た灰色の舗装道路、これが大正、昭和の初めごろまでクロバーの咲きほこった、あの同じキャンパスなのであろうか。旧神学館の楼上で朝の礼拝のひとつときは、相国寺の松籟も静けき音楽としてたのしめたではないか。静寂と一種の香気―詩情とでも言えるものが同志社構内いちめんを包んでいた。神学と文学が一つに溶けあい、法経の学生にも新島ムードが理くつなしにしみこんだ。僕は校友の一人として、伸びゆく同志社を讚美し慶賀する。併し今の同志社からは取つく島のない、よそよそしさを感じる。どこにでもありそうな大学、匂いと、うるおいと、豊かさを失った一大科学工場――酒に強い彼にもう一時間もつきあっていたら、こんなことを、づけづけ言ったか

も知れぬ。

たのしい初夢というものを、一度くらい見たいものと、元旦の夜にはときどき思う。今年には地方では名家とうたわれる家柄の若夫婦の細君が年末に急逝し、私は大晦日の汽車に揺られて紀南の家に着き、元日は海岸の波の音を聞きながらお通夜でその夜を明かした。夜ふけと共に夢魔におそわれる若い背の君と対座して、私もいつしか、とろとろしたのであろう。

見渡す限りの平野、丘陵、前面に朝日にかがやく湖、背景は松柏杉と雑木をまじえた山、その山裾が孤を描いて、数百万坪にも近い学園のキャンパスを取まわっている。遠い森の中に会堂の尖塔だけ見える。鐘の音が、どこからともなく流れてくる。礼拝の始まる時間らしい。三々伍々、男女の学生が森の中に消えてゆく。総勢二万と大きく学生はどこに居るのか、三階建の校舎は、あちらこちら、雑木の間に見えるが、こは自然の中の景物としてしか学生の存在は感じられない。湖の存在は感じられない

い。湖の方から、長い尾をひいて流れてくる船の汽笛だけが生きもののように見える。

お通夜のまどろみの霞の中に浮き出た、この一幅の絵は、わが友の歎声の反作用が描いてみせたいたづらか、学窓時代から数えると、ほとんど半世紀近く同じ学園で憎眠をむさぼった一人の男の、さらに五十年さきに実現せよと希う、見はてぬ夢のひとこまか、とにかく、お正月というものは、先輩と雖も、年輪を忘れ、たわいもなく稚氣童心に帰るのかも知れない。(経済学部講師)

## 十年一昔

土山 登

商高に勤務して足かけ十一年になる。

学校を出てすぐ教壇に立ったわけだが始めは自分より年令の上のものがゴロゴロいて気分的に負担を感じたものである。

商高は高等学校ではあるが夜の学校というところから全日制の高校にみられぬような逸話も多い。その二、三を紹介してみよう。

先にも一寸ふれたが生徒の年令もこの頃でこそ大分まともになって来たが、数年前では随分差があったものである。四十過ぎたような人も何人か卒業していったが、そのうちの一人は商店を経営している人で我々は社長さんと呼んでいた。父兄会などになると奥さんが来られたのだが、卒業されたときは我家にも挨拶に来られた。私の家はすつかり保護者と間違えて盛んにお子さんにも遊びに来るように何のこ応対していたが、後で生徒だと説明するとすつかりビツクリしていた。

ある先生は学校を出てすぐ商高の教壇に立つと生徒の中に自分と小学校のときに机を並べた同級生がおり、やりにくくて困るとコボされていた。

修学旅行にも付添ってゆく機会もあったが、生徒の中にはパリッとした背広を着こんで来る者もある。我々のヨレヨレの背広とは比べものにならない立派さで、旅館についても女申さんがそんな生徒をつかまえて先生どうぞと案内し、私などは生徒扱ひされて苦笑したこともあった。中には修学旅行先で、自分の店の商売をやって軽く修

学旅行の費用をうかしてしまふ手合もいる。

また、商高の生徒は90%前後は就職しており、その職種も千差万別である。そこで街に出ていてもどこで生徒に会うか分らないので油断ができない。

ある先生が百貨店でお菓子を買ったらその隣の売場に生徒がいて、どうしてうちのお菓子を買ってくれなかったのかと文句をいわれ、オチオチ菓子も買えないとコボしていた。

しかし最近では商高も生徒の年令差が少なくなり、平均化して来た。また、この頃入ってくる生徒は中々快活で、商高の空気も大分変わって来た。私もようやく生徒と間違えられることが少なくなったのは、生徒が若返ったせいだろうか、それとも十年の月日のなせるところだろうか。

(商高教諭・商業)

## きじになった話

樋口 秀雄

授業が終わって廊下に出たときは学生によび止められた。私の故郷の信州から来ている学生のMである。「先生お宅へ伺ってもよろしいですか？ 山から土産を持って来たもんですから。」山からの土産というから山ごぼうの味噌づけだろうと思った。夕方彼はナツヅックを肩にかけてやって来た。「こんなもんですが」と言つて差出したのは予想もしなかつた雉子である。冬休みに帰郷したときとつたものだという。四つになる子供ははじめは怖る怖る手を触れたが、そのうちに可愛らしいといつて抱いたりした。「食べたなら可愛そうだ」とさえない出す始末である。妻や私などは珍らしいものをもらつて、いささかとまどつてしまった。「私が調理すればよいのですが試験前ですので」といってMは帰つて行った。

「明日水だきをするからは是非来て下さい」とMに伝えていたからである。「どこもやってくれるところがなければ、残念だけれど誰か欲しい人にやるか、捨てるかするより仕方ありません」と妻は言った。しばらくして、また妻から電話があった。「やつと見つかりましたから学生さんに来ていただいて結構です。」私はほつとした。もし捨ててしまつたら、Mになんと弁解してよいかわからなかつたのである。日曜日にMは恐縮してやつて来た。水たきにしようと思つたけれど、色々考えてすき焼にしました、と妻は言った。聞いたことしかない雉子の味を、今こうして実際に味うことが出来るのだと思うと、何か高級な生活をしている人間のような気さえした。「どれどれ戴くとしようか」といって一切れを口に入れた。「こりやうまい、少し、かしわに似た味だけど、やつぱり違いますね。」というと、「僕は良く食べるけど、本当のところ味はそう変らないですよ」とMは答えた。妻は「これは鶏だから大丈夫よ。雉はお料理してくれるところがなかったから人にあげてしまつたんだから」と

子供をだまして食べさせた。食事が済むとMは試験勉強があるので、といつてすぐ帰つた。妻は私に、「どう、おいしかった？ 実は坊やに言ったことが本当なんです。そんなことをいつたらあなたが困るだろうと思つてあんなこといつてしまつたんです。それでも結構雉子だと思つて食べたんですからいいでしょう。学生さんにはすまないけれど」といつた。すき焼にした理由がわかつた。学生のことを思うと、鶏を食べさせたことより、嘘をついてしまつたことを反省し、責任すら感じた。はるばる信州から持つて来た雉子を捨て、鶏を食べさせた虚偽の行爲に対して、なんとかあやまらなければと思つた。

二日後、廊下でMに出合った。Mは「昨日はありがとうございました。あれは坊やのために剝製にされたんですか。それにしてもやつぱりかしわの方がうまいですね」といつた。彼は知つていたのである。

(昭三六大院英卒・立命館大学専任講師)